

穂高に生まれる

相馬愛蔵（1870～1954）は、安曇郡白金村（現在の穂高白金区）の農家の三男として生まれました。東京専門学校（現在の早稲田大学）在学中にキリスト教の洗礼を受けた愛蔵は、正義人道を重んじる近代人としての教養と信念を高めていきました。1890（明治23）年に卒業してからの約1年間は北海道で蚕業に従事しながら、北海道禁酒会の会長、伊藤一隆（かずたか）を助けて、禁酒運動に没頭しました。

帰郷後、養蚕の研究を記した「蚕種製造論」「秋蚕飼育法」を出版すると、より科学的で画期的な技術書として大変な反響を呼び、全国の農村青年が愛蔵の教えを受けに穂高を訪れました。

また、在郷の青年たちと東穂高禁酒会を結成し、節制勤勉などを広める活動をしました。研成義塾を創設した井口喜源治（いくちきげんじ）も、後にこの会の中心となり活動しました。

上京し中村屋を創業

1897（明治30）年、28歳の時に黒光（こっこう）（旧姓星、本名良）（1876～1955）と結婚。1901（明治34）年に上京し、東京大学正門前の中村屋というパン屋を居抜きで買い取り創業しました。その後、本店を新宿に移し、新宿中村屋として、和菓子や洋菓子を販売。努力を重ね良い品を安く売ることが基本に必要以上の利益を求めない、正札主義（しょうふだしぎ）の商法で見事小売業として成功しました。

大正末から昭和の初めに新宿に百貨店が多くなると、営業時間の延長や優秀な技術者を招へいするなどの対応をしました。また、1927（昭和2）年には喫茶部（レストラン）を開設。中村屋を代表する商品「純印度式カリ」月餅「中華餅」



新宿の現在地に移転した中村屋



中村屋の創業者 相馬愛蔵・黒光夫妻

特集◎安曇野ゆかりの先人

相馬愛蔵と中村屋

市では、このたび市のふるさと観光大使に、食品メーカー株式会社中村屋（東京都）を任命しました。同社の創業者は穂高出身の相馬愛蔵。和洋菓子の製造・販売やレストラン経営など多くの事業を手掛けて成功する傍ら、多くの芸術家を支援しました。ふるさと先人、相馬愛蔵について紹介します。

まん」を発売します。これらの施策が功を奏し、百貨店の出店にも負けず、逆に売り上げを伸ばすことに成功しました。

そして、百貨店研究と酪農畜産視察のためヨーロッパを旅行し、「欧州視察談」や「素人の店頭談」等を執筆。広い視野と体験に基づく商道の信念、後進への指針を分かちやすく丁寧に説いたほか、社員の情操教育にも力を注ぎました。

荻原守衛（碌山）など 芸術家を支援

相馬愛蔵と黒光は、芸術に深い知識と理解を持ち、物心両面で芸術家を支援しました。新宿移転後、中村屋には多くの芸術家、文人、演劇人らが出入りするようになりました。

東穂高村矢原（現在の穂高矢原区）出身の荻原守衛（碌山）（1879～1910）は、1908（明治41）年にフランス・パリから帰国後、新宿西口にアトリエを設け、中村屋に足しげく通いました。その碌山を慕い多くの画家や

彫刻家も中村屋に出入りし、芸術談義が交わされました。その様子は後に「中村屋サロン」と呼ばれるようになりました。

碌山が30歳の若さで亡くなると、サロンの中心人物となったのが中村彝（なかむらつね）（1887～1924）でした。彝は中村屋にあるアトリエで生活し、多くの芸術家が彼のもとを訪れました。相馬家の子どもたちをモデルに多くの作品を残しました。

また、夫人の黒光は文学や演劇の世界でも支援活動を行いました。中村屋店内での朗読会の開催や自宅の蔵を劇場にして演劇をするなどをし、劇作家の秋田雨雀（あきだりやうさく）や女優の松井須磨子、水谷八重子が集いました。



荻原守衛（碌山）